電氣新聞

2010/10/

葬式は、要らない

島田　裕巳　著

幻冬舎新書

777円

本棚から一冊

評者　早稲田大学大学院教授

川本　裕子

慣行を客観的データで明快に説明

人口の高齢化が進む日本社会では死人も自然と増えている。葬式や人やお塵の数も増え続けるのは必然の流れだ。一方で、血縁や地縁の希薄化や個人化という人間関係の変化はこの間も進む。葬式のあり方とは、どのように人の生死に区切りをつけるかという、あらゆる人に等しく当てはまる普遍的な問題であるのだが、多くの人は普段はほとんど考えたことがないというのが実情だろう。書評子もその例外ではない。いろいろなニュースに触れるうち、考える視点を求めて本書を手にとってみた。

現代日本の葬式の慣行がどのような歴史的な経緯で成立し、なぜ国際的に見て特異なのか。多額の費用の内訳はどうなっているのか。こうした基本的事実が、客観的なデータの根拠に裏付けられながら明快に説明される。日本の葬儀費用は平均233万円と世界のどの国と比べても突出して高いという本書の指摘は驚愕の事実だ。そうだとすると、これまでのような日本の葬式のあり方はこのまま変化しては済まされそうにない。誰もが基礎知識として押さえておくべき事柄がわかりやすく示されている。ただし、「便利なチェックポイント」的な葬式ノウハウ、ハウツーものでは決してなく、あくまで自分が葬式にどう向き合うかを考える上で材料を提供してくれるという意味である。

また、本書は、題名から想像されるような、「葬式不要論」を押し付け的に主張してくるタイプの本でも、実はない。もちろん現在の日本の葬式が抱える問題点―例えば戒名も日本だけにあるもので、かつそれに相当お金がかかっていることなど―は教えてくれるが、しかも説得的に指摘してくれるのだが、結論として自分や家族の葬式をどうすべきかについては、各人が判断していくべきだというスタイルで一貫している。

あるべき葬式を論じることは、生をどのように送るべきかという真摯な問いかけと表裏一体であることが改めて浮き彫りになる。広い意味で自分の人生で何が重要か、を見極めることの大切さを問っているように思う。